

子どもの死生観の解明

—子どもの生きた経験から見えるもの—

谷 川 友 美

Explication of children's view of life and death:
When seen from children's living experience

Tomomi TANIGAWA

【要 旨】

本研究は、幼児・学童期の子どもたちを対象に、「生と死」の概念を明らかにすることを目的とした。5名の子ども（3歳児4歳児5歳児6歳児7歳児）を対象に、絵を描きインタビューを施行した。子どもたちが自ら描いた絵の説明をする状況から、子どもの生きた経験を自由に子どもの見地から明らかにした。子どもたちは、様々な宗教観を自分なりに解釈し独特の世界観を作り上げていた。独特の世界観の形成には、下記の3点が影響していることが明らかになった。①今まで生きてきた経験の中において読み聞かせや映画など物語として知り得たこと。②1年を通して行われる文化・伝統的儀式や様式を通して得られたこと。③養育者等身近な人の日ごろの関わりの中で伝えられた情報や知識。今後、このような子どもたちの世界観を活用して、グリーフ・ケアおよび死生観教育にどう活用できるか検討する必要がある。

【キーワード】

死生観 子ども ケアリング 教育的関わり

1. 緒言

昔の日本社会はどのように死を迎えていたのか。かつて人々は家庭の中で老い衰えそして死を迎えていた¹⁾。家族が最後を看取ることは、どの家庭もごく自然な事であった。そのような場面を家族で共有できることは、死に対する心構えを学ぶ良い機会でもあったといえる。しかし、現代は多くの人が病院や施設の中で死を迎

えており、死について学ぶ機会は失われつつあると言えるのではないだろうか。

近年、子どもの自殺、深刻ないじめ、脳死や臓器移植、少年による殺傷事件、出生前診断など、子どもを取り巻く社会の中で死に関する問題が大きな社会的関心事となっている。死を迎える場所の変化により死が非現実的なものになりつつある中で、メディアやゲームが与える間接的で一方的な死が、子どもに及ぼす影響に関して盛んに議論がなされている²⁾。痛みや苦し

みを伴わない仮想現実の死を体験することで現実と区別がつきにくくなっているとの指摘や、近年増加している少年犯罪や事件との関連性を指摘する声がある³⁾。子どもの心の荒廃が懸念されている現在、「心の教育」が提唱されているが²⁾、同時に「生と死の教育」の必要性も高まってきていると言える。

「生と死の教育」は、子どもに不安や恐怖を与えるのではなく、生きていくことの大切さや生かされていることの尊さを体験させることが目的である。教育現場では、「生と死の教育」という文脈の下で授業が実践されているようになってきている⁴⁾。デーケンは、「乳幼児期における死への認識過程を知り、それぞれの時期に合わせた教育を行うことをもっと重視すべき」と述べている⁵⁾。また、「死」が日常とかけ離れたものとなっている今日において、子どもが愛する人を失った時の衝撃は大きいと考えられる。悲哀の過程が不十分であると、「うつ状態に限らず、種々の精神病や神経症、あるいは問題行動となって現れると言われて⁴⁾。

筆者は、看護師でありグリーフ・ケアに関心があり、それぞれの発達段階によるが、どのように生/死を捉えるかを知る事は重要だと考える。また、現在小学校教諭・幼稚園教諭・保育士を目指す教育機関に勤めており、いかにして「生と死の教育方法を教育・保育を目指す学生に教授できるか」暗中模索の状態にいる。

赤澤は大人の成熟した死の概念として、不可逆性、無機能性、普遍性の3つをあげている¹⁾。また、Smilanskyは、不可逆性、最終性、不可避性、因果性の4つをあげている。死の概念の構成要素は研究者によって取り扱う数と名称が異なっている。各研究の構成要素を吟味すると、不可逆性、最終性、不可避性、因果性がポピュラーと考え見ていく。すると、認知理論の視点に基づいて、死の4つの形式的な要素、つまり『不可逆性』、『最終性』、『不可避性』、『因果性』²⁾の理解度から、子どもの死生観を研究する子のアプローチは、その理論的根拠の希薄さもさることながら、子どもたちの考えが死の理論形成的な概念に到達しているかど

うかの評価に終始しており、実際に死が子どもたちにとってどのような意味を持つのかという点の探究からは程遠いと言えないだろうか。子どもたちの死についての日々の理解を明らかにするにはどうすればよいのか。筆者は、子どもたちの言葉から、その死に関するイメージや印象や発想や死の持つ意味といったものが浮き彫りにされる質的なアプローチが必要とされると考える。

先行研究では、子どもの死の概念を獲得する年齢は異なり、死に対して特徴的な考えを持っていることは、多くの研究から明らかである。幼児は、死という言葉そのものを理解できないかもしれないが、自分は一人ぼっちにされているのではないかという不安を常に抱いている⁶⁾。5歳以下の子どもにとって、死は愛する者からの分離と同義語といわれており、子どもなりに考えた死を体験している。「いない、いない、ばあ」は、子どもに瞬間的な分離不安を起こさせ、その後安心させて喜びを与える遊びであるといえる⁷⁾。東京都立教育研究所が行った、『子供の「生と死」に関する意識調査』³⁾では、「死ぬとはどのようなことか」という質問に対して「動かなくなる」、「車にひかれる」、「血が出る」、「ピストルで撃たれる」など自分が見聞きしたことを具体的に回答していた。生命についての考え方の調査では、幼児は「動く・動かない」、「息をする・しない」、「手足がある・ない」といった目に見える現象を生物・無生物の識別の根拠としているとされていた⁸⁾。また、物事に意識や生命があるとするアニミズムの考えを持つ幼児の比率は非常に高く、特に女兒にその傾向が強いことが明らかになっている。そして、生命が有限であるという考えは、幼児においては不確かであるという結果が出ている³⁾。これらの結果から幼児期における「生と死」に関する意識は未確立の段階で、幼児から小学生低学年にかけて、「生と死」の認識が急激な深まりを見せる重要な発達段階であると考えられるとされている⁸⁾。

学童の5歳から9歳頃の子どもの場合は、死ぬと再び生き返ることはないということを認識

するようになるが、死は自分の身には起こりえないものとして考えている⁶⁾。死の存在を否定しているわけではないが、自分のこととしては考えられないと、グロルマンは分析している⁶⁾。10歳以上になると現実に即した死の概念が持てるようになり、死の普遍性と肉体機能の停止を理解し、死の概念は成熟したものとなる⁶⁾。東京都立研究所の調査³⁾によると、小学1年生から2年生の頃に生命の有限性に関する認識がほぼ出来上がると述べられている。しかし稲村は、その頃の学童は「まだ生き返ってることが出来る」とか、「赤ちゃんになって生まれてくる」という考えが心のどこかにあり、再生の願望を持っているとしている⁹⁾。また、再生願望については4年生以上の各学年とも5割以上が肯定的に捉えており、その理由として、やり直しを望む物や未来への関心を示すものがあるということであった。さらに、生物・無生物の識別では、「考える・考えない」は1年生から「心がある・ない」は4年生から識別の根拠としていることが明らかになっている。このように死の概念の獲得年齢に差や発達との関連が生じている理由として、赤澤は被験者数や解析方法、質問内容の難しさや質問項目の違い等をあげている。年齢によって変数を比較することは、様々な学問領域の分野や統計的調査でも有効であると述べながら、死の獲得年齢よりもさらに興味深い要因の一つに認知発達のレベルであると結論付けている¹⁾。つまり、子どもが「生や死」を正しく理解するには、正しい認知発達が必要不可欠ということで、ピアジェの認知発達理論に照らし合わせ研究を進めている。この傾向は1970年代の研究から現在に至るまで続いている。

グリーン・ケアや死生観教育に関する先行研究は、日本において2002年までの所多くない。これは、1990年代後半までに子どもの死の概念に関して90以上も研究発表がなされている英国圏社会と比較して明らかに遅れていると言える。日本社会に根強くある死へのタブー視する傾向も、この領域での研究の発展を遅らせる原因ではなからうか。しかし一方、2002年までの

研究もその後も研究の大半がピアジェの認知発達理論を概念枠組みとして偏重している印象を持つ。かつ認知発達段階を子どもの死の概念の発達段階にそのまま当てはめている傾向が顕著であると相良は先行研究の指摘を行っている¹⁰⁾。

それ故に、本研究は、日本において幼児・学童の子どもたちを対象に、「生と死」の概念を明らかにする。今までの研究と異なる点は、その子どもの生きた経験を、既存の理論等は使用し概念構成要素を当てはめることはせず、子どもが自由にいきいきと子どもらしく、子どもの見地から明らかにすることを目的とする。

注) 不可逆性：生きている者が一度死ぬと、その肉体は二度と生き返ることはできない。生物学的成長の変化や以前の状態に戻ることは不可能であるということ。Gartley & Berhasconiは「死は最終」、Koocherは「死は永遠」としてその不可逆性を述べている。この不可逆性の概念は、死後の霊的な存在を信じる考えとは異なる。

最終性：肉体機能、新陳代謝、感情、動作、思考といった、生きている時に行っていること全てが死によって終わるとのこと。肉体が機能しなくなる、精神的感情的な反応がなくなる、動かなくなることの3つに分けて考えている

不可避性：自分も含めて生きている者は、全ていつかは必ず死ぬということ。普遍性と呼ばれることがある。不可避性には全ての人を持つ死の運命、自分の持つ死の運命、加齢の3つの側面が含まれているとしている。そして加齢を生物学的成長の流れと死の理解であると定義している。

因果性：死は肉体的・生物学的な要因があるということ。人が亡くなった場合、残された人が自分を責め、罪悪感に駆られることがある。概して子どもの方が大人よりも罪悪感を覚える度合いが大きい。因果性を理解することは、そうした子どもの苦しみを和らげる手助けになるとの指摘もある。Glaubman, & Bermanの研究

では、因果性は子どもにとって最も理解することが困難な要素であり、経験や成長が必要だとしている。 出典：引用文献1) より

2. 研究方法

(1) 研究デザイン

ハイデッガーの実存主義を哲学的基盤とした解釈学的現象学による質的研究である。

(2) 研究対象者

大分市在住の5家族の子ども5名(3歳男児、4歳男児、5歳女児、6歳男児、7歳女児)であった。平均年齢5.0歳。5名とも両親と生活しているが、4歳男児のみ父親がフランス人母親は日本人という家族構成であった。

(3) データ収集法

本研究では、対象者に「生きていることと死んでいること」について絵を描いてもらった。その絵にまつわるエピソードやその絵になった考えを親や研究者が問いながら明らかにするという手法を取った。保育研究会(子どもたちの絵について勉強する会)では、「絵はこどもの心の表現」とし、子ども自身の認知や発見、感動、感情、時にはストレスまでも含むものとしている。描かれた絵を研究データとする研究は、小児の研究領域に当たり、数多く見られている。本研究では特に、絵は言語表現と比較し、幼児・学童期の段階の子どもの発達段階に

よる表現力の差がない点、また子どもが認識している象徴そのものを分かりやすく直接的に表現できる点が重んじて取り組むこととする。描かれた絵から研究対象者および研究結果を読む他者が、どのように分析して結果を出すのかその足跡を辿りながら結果を導き共有することそのものが、本研究の信頼性の確立に繋がると考えるからである。

本研究は5名の子ども達の自宅にて絵を描いてもらい、親若しくは研究者がその絵について子どもと話をする場面を記録した。研究者がその絵について話が出来た際は、ノートを片手に参加観察法で行った。ビデオで撮影した子どももいるが、ビデオが気になり、本来の子どもの様子が見受けられない場面もあったため、ビデオ撮影は中止した。

絵を媒介に、子ども達にどのように関わっていくかの手順は家族に表1を渡し(表1参照)手順を追って実践してもらった。それで聞き取れた内容を研究者に伝えてもらった。もしくは研究者自らが手順を追って実践した。

データ収集は、2011年8月~2015年8月の間に実施された。

表1 データ分析法

対象者の正確な「生活している世界」を探るため面接で得られた言葉のデータだけでなく、参加観察で記録された行為や沈黙、子ども達とのセッション中の観察した様子すべてを、Ben-ner¹¹⁾が提唱している解釈学的現象学を基盤とした3つのアプローチに沿って、分析・解釈し

表1

1) ウォームアップ(質問・声かけ)

【質問の例】

・今までに「生きる」「死ぬ」という言葉をきいたことがある? / 考えたことがある? ・その時どんなことを感じた? 考えた? ・今まで死んだ生き物(動物)なんかを見たことがある? どんな場所/機会に? ・どんな感じがした? ・今生きる/死ぬってことはどんな感じがする?

2) 子どもにお絵かきをしてもらう

3) その絵についてお話しをしてもらう(聞き手: 家族若しくは研究者、語り手: お子様)

関わりのポイント: 出来るだけ自由に語ってもらう。象徴的な絵について何を書いたのか尋ねる。どうして書いたのかという理由を尋ねる。どういう考えを持っているのか、思い出や経験があるのかについて尋ねる。

4) その絵を研究者に渡してもらう

5) もし研究者が解らないことがあれば、尋ねるのでその場ないし後日答えてもらう

た。これは、Paradigm Case, Thematic Analysis Exemplarsを同時に探求していく。また、その時々で与えられた事柄を意味として現れた純粋な現象として提示し、その現象の普遍的な特徴を記述し、体験の意味を理解することを目的としている。具体的なデータ分析は、以下の手順で行った。

- 1) 子どもと話をした生や死に関する概念に関して、注意を引く点、研究者や話をした家族が感じたり考えたりした点をメモに書き留める。また、参加観察した事柄もその時々書き留め、メモを作成した。
- 2) 描かれた絵と1)を合わせ、全体を通してあらためて丹念に再考する。
- 3) 1)と2)の内容も含め、経験の移り変わりや変化の単位を明らかにした。
- 4) 3)の中で、同じ状況について語られている部分、それに付随するシンボルとなるキーワードや事柄や感情の表現を1つの構成要素とし、その状況を対象者がどのように意味づけているのか把握した。
- 5) 対象者の実際の絵や言葉を研究者の言葉や概念に置き換えながら、構成要素ごとに記述を行った。
- 6) 各構成要素を継時的・感情の流れに沿って並べ、対象者の体験世界を一つのストーリーとしてまとめた。
- 7) 記述を繰り返し読み、対象者の体験世界を研究者が解釈し、体験の中心的な意味を見出した。
- 8) 5名の対象者の絵と記述から現象の全体構造を統合し共通する意味を類似化した。

本研究では、対象者である子どもが捉える「生と死」を、“客観的な現実（外部から観察可能な世界）”ではなく、あくまでも子どもの“主観的な現実（内部者の視点）”から明らかにしようとするものである。研究者はすべてのメモと解釈を総合して、「子どもの主観的な現実に浸り、あるいは家族の中で主観的な現実がある場合は、その主観的な現実を理解しようとし、子どもの考えと認識、その環境の中で生きている者の見方を探る」という立場をとる。ま

た、研究者が「語ること」やスーパーバイザーが「問い直す」という時間を設け、研究者の視点の対象化に努めた。視点の対象化とは、研究者がスーパーバイザーに「分析過程を示し解釈を語ること」によって、「思い込み」や「とらわれ」に気づく事をいう。また、現象学的研究の経験のある研究者1名と幼児心理教育に携わる心理分野の研究者1名に研究者が再構成した体験の記述・解釈を提示し、研究者の解釈が妥当であるかを確認し真実性を高める努力をした¹²⁾。これらは事象を捉える際、認識の仕方をどう考えるかという認識論が基盤になっている。

(4) 倫理的配慮

研究対象である子どもと家族（本研究は母親のみ）へ、研究内容の説明を行い、参加は任意であることを伝えた。研究参加に賛同を得られた子ども及び家族のみの調査とし、途中で辞退することも可能としている。絵を描くことや参加観察や絵を示した質問の時間は中断されることも視野に入れ研究を進めた。途中でビデオ撮影に関して意識しすぎる場面があったため、ビデオ撮影は急遽中止し参加観察での観察ノートを記録した。フォローアップとして、研究者の連絡先を研究対象者に伝え、心配や相談があるときはいつでも連絡をくれるように口頭でも再確認したが、現時点まで連絡は受けていない。尚、守秘義務を厳守するためにも、研究内に出てくる名前はすべて仮名である。また、子どもたちの絵の掲載許可は得られている。

3. 結果及び考察

(1) 事例1 B君（4歳男児）のケース

B君は、父親がフランス人で母親は日本人であった。日本で生まれ育ち現在幼稚園に通っている。母親は結婚前フランスに留学するなど、海外への関心が強いが、結婚後一度もフランスには行くことがなかったようであった。父方のフランス在住の両親は1年に1～2回来日している。年中行事はやっている（お正月やお墓参

りやハロウィンやクリスマス)が、お寺が経営している幼稚園に通うようになり、七夕等日本らしい行事も増えたと母親は語る。しかし、性格的にはフランス人特有なあいまいさを嫌う気質を息子は持っていると話し、はっきりと明確にものを言う文化は父親から受け継いでいると解釈していた。

研究者：B君。これはなあに？(絵を指して尋ねる)

B 君：ライオンと電車と、イルカと、キリン。

研究者：そっか、みんなニコニコしているね。どうして？みんな楽しんでいるのかな？

B 君：みんな生きているから

研究者：あれ？少し怒ったような顔があるけど、これはなあに？

B 君：こわいやつ。こいつが来たら死ぬ。

研究者：そうなのね。こいつが来たら死ぬのね？大きな口を開いているけど怖そうね。

B 君：こうやって死ぬの。怖いやつが食べるから。死んだらキリンがライオンになる。ライオンが死ぬと、イルカになる。そしてまた生きられる。

B君のストーリーには、2つの考え方が根付いていた。一つは、人や動物などの生き物以外にも全て命があり生きているという考え方である。電車だけでなく、ピアノやコップなど家の中にあるものすべてに命があると考えていた。



図1 B君の絵

2つ目は、命あるものは、死んだとしてもまたべつものになり生きていくという考え方であった。フランス人を父に持つB君だが、フランス語は数と歌といった極めて限られた範囲のみのフランス語しかはなさず、冗談や感情表現も全て母音を使用する日本語を使用していた。母親は、成長発達時期として大切な幼少期に2か国語を習得せざるをえない状況を強いると、言葉の発達や理解およびコミュニケーション能力に問題が後々出てくると考えたようである。母親の考えのもと、読んでもらう本も日本の本が多く、おもちゃも折り紙で飛行機を折るなど日本の伝統文化を重要に思って選んだものを家の中に置くようにしていたという。絵に描かれた死後再び生きるために新たな命をもらうという考え方は、仏教の教えの影響を受けていると考えられる。仏教の輪廻のアイデアの出所に関して母親が思い当たるころは、日本の絵本の世界で教えたことがあると話していた。また、お盆や法事などにB君を同行させ、手を合わせ死者は生き続けていることを母親の想いをこめて話した経験もあったようである。

(2) 事例2 Cちゃん(7歳女兒)のケース

Cちゃんは、死んでも天国と地獄といった2か所に分かれる場所の存在を強調していた。Cちゃんの母親は無神論者であったが、話を聞くと幼少期は外国の物語よりも日本の物語に心を動かされた経験が多かった。母親は、Cちゃんに小さい頃から「わるいことしたら鬼がくるよ」「嘘はついたらダメ、嘘をつくともんさまに舌を抜かれるよ」などといった言葉をかけていたと、この調査の後反省したように語ってもらった。

研究者：字がいっぱい書いてあって、ちゃんと説明しているね。もう少し詳しく書いていいかな？この地獄鏡が置いてある所の人もしかして閻魔様かな？「どちらでしょう？」ってきいているけど、どちらかに行くってこと？

Cちゃん：この鏡にうつしたら、悪い人は悪い顔になって、青緑のきちゃん顔

色になる。そうでない人は肌色の色の顔の色になって天国へ行ける。鏡をみてどっちにいくか調べるので。地獄は、針のような山を歩かないといけないし、血を熱くした温泉に入って辛い思いをしなければならない。

研究者：「1日20冊の本を読まないといけない」と書いてあるのは？「いきのみおに」って何かな？この（左下の）小さな石かナイフのような形のものは何かな？

Cちゃん：本を読むのは、嫌いだから。面倒くさいから。これは罰で毎日やらないといけないルールになっているわけ。あと、この小さいのは、「歯」。歯を抜かれる。でも抜いてちゃんと枕の下に入れて寝たら、妖精がきて助けてくれるかもしれない。たすけてくれないかもしれないけど。

Cちゃんは、地獄という場面をどのような影響を受けて認識しているか尋ねると、「じごくのそうべえ」という本に影響され、母親もそのシリーズの本を何度も繰り返し読み聞かせた経験もあった。またCちゃんの曾祖母が研究協力してもらった丁度1年前に亡くなり、火葬に参加するという体験もあったようである。その際よく解らないままCちゃんに死んだ人がいく所が存在することを伝えてしまったと語っていた。日本人の生と死の見方は、Cちゃんのよ



図2 Cちゃんの絵

うに、神道、仏教、キリスト教などといった沢山の複数の宗教の様々な点を見事に融合させている見方が多いのではないだろうか。日本社会の汎神論的信仰のシステムを繁栄しているように思われる。

(3) 事例4 S君(3歳男児)のケース

S君は自分の身近な人々を描いてくれた。そして、死んでしまった人は表現しないというのがS君の死ぬというげんじつであった。一番大きい緑の○で描かれたのが父親(右上)、その下が母親、その下が祖父、一番左に描いた赤の○がS君でそのとなりが姉であった。祖母は3歳の時亡くなったため、描かない(描けない)と断言した。この絵をかく際、研究者より母親の問いかけの方が、S君の考えが良く聞き取れると考えたため母親とのやり取りを示し考察していく。

母親：おばあちゃんは死んだね。最後にS君はおばあちゃんにキスしたね。

S君：おばあちゃんは死んだけど、ここにいるよ。(仏前を指さし答える)

S君：おかあさん、S君は(僕は)死んでもいいの？ おかあさん、嫌い。S君は死んでいいんだな。死んでしまうぞ。

S君は、生きていることは人として表現でき



図3 S君の絵

るが死んでしまうと描けないことを示していた。また、母親との会話の中で、不機嫌になる場面も沢山あり、その場面には必ず「ぼくがしんでいいの、困るだろう、困らないためにも、この状況をどうにかしてくれ」といった主張を台詞の様に繰り返している様子が伺えた。S君にとって、死ぬことを母親に示すと、母親は自分の言う事を聞いてくれる最後の言葉と捉えているように思われた。

(4) 事例5 Kちゃん(5歳女児)のケース
図5は天国の様子であった。生と死のテーマでKちゃんは天国の絵の説明を行った。

研究者：この絵のある2人(顔の全面が表現されている中心に描かれたのは何か)な？

Kちゃん：天使。……。……。……。……。死んでいる人

研究者：こちら側にいる3人とかぼちゃは？

Kちゃん：生きている人が天国に行くとき見送っている。……。かぼちゃは、この前ハロウィンを幼稚園でしたから書いた。

研究者：天国に行くときはお別れの時だね。これはどこなのかな？あと、手を振っているけど、どうして？

Kちゃん：わからん。地球……。……。死ぬときはみんなわかる。それで、みんな手を振っている。地球で生きている人も、天国に行く人も、それでバイバイできるから。

研究者：Kちゃんは、人は死ぬと天使になると思うのかな？

Kちゃん：わからん。誰もしらんし。わからんと思う。でも死ぬときはみんなさよならを心でしている。だからみんな悲しいけど手をふったりしてさよならというの。

Kちゃんは、天使に近いイメージする存在に人間から変化するものと思っており、泣きながらも心の奥で別れを告げあっていると考えていた。天使の存在は、神の存在の肯定をしているような印象に感じられた。また、天使のような

神のような存在になり空高く昇っていくことが死ぬことであり、死んでからも空から地球を見下ろすことができると思っていた。宮崎駿の映画「となりのととろ」で幽霊やお化けも空から地上に現れ人間と関わる事が出来るように、天使のような神のような存在も其れが可能であると信じていた。また、生命が誕生することは、天から瞬間移動して、とある母親のお腹に宿るといのである。死んでしまった人(天使のような神のような存在)がまた赤ちゃんになって母親のお腹に宿る場合もあるし、突然生命がどこからともなく生まれてくる場合もあるという。死んだ人が生き返るといった輪廻の考え方も表現されていた。キリスト教に非常に影響を受けていると思いきや、日本社会における仏教の生と死の概念(成仏と生まれ変わり)および、神道の影響(祖霊と怨霊)は浸透し融合されているように考えられた。



図4 Kちゃんの絵

(5) 全ての事例を通して
子どもたちは、生と死の概念を個別にとらえ

ているのではなく、死ぬまでの一つの流れをそれぞれのストーリー性のある場面で捉えていることが明らかになった。中には、仏教特有の輪廻の考え方を取り入れて場面を捉えている子どももいた。また、地獄と天国に行く人がいると分けている場面を捉え、死んだ場合、どちらに行く可能性もあり、死んでみないと解らないといったスリルある場面が訪れると考える子どももいた。話をきくと、色々な場面を絵本や行事における親とのかかわりなどで、見聞き・経験する中で学び意味づけているものが多かった。妖精や天国といった概念はキリスト教信者の考え方かと思いきや、詳しく聞いていくと、仏教の考え方(成仏と生まれ変わりなど)が混在している発言も多かった。子どもたちは、生きることと死ぬことをテーマに問うと、死後の世界について想像し描くケースが多かった。仏教や神道の霊の考え方、神の存在、天国と地獄など頭の中で上手く解釈し独特の世界観を作り上げているように感じられた。様々な宗教観が融合した考えを持っていることが明らかになったといえるのではないだろうか。吉良は、このような複数の宗教観を融合した考えを持っている認識の仕方は、日本特有であり、日本社会の汎神論的な信仰システムの在り方を反映し、信仰心よりも文化・伝統的儀式を通して、育ち養われていっていると述べている¹⁰⁾。日本文化は宗教を受け入れやすいが、それは信仰心よりむしろ儀式や様式を通して受け取られており、ひいては伝統にさえなっていると考えられる。

4. 結語

子どもたちが自ら描いた絵の説明をする状況から、子どもの生きた経験を自由に子どもの見地から明らかにした。子どもたちは、様々な宗教観を自分なりに解釈し独特の世界観を作り上げていた。独特の世界観の形成には、下記の3点が影響していることが明らかになった。

- (1) 今まで生きてきた経験の中において読み聞かせや映画など物語として知り得たこと。

- (2) 1年を通して行われる文化・伝統的儀式や様式を通して得られたこと。

- (3) 養育者等身近な人の日ごろの関わりの中で伝えられた情報や知識。

今後、このような子どもたちの世界観を活用して、グリーフ・ケアおよび死生観教育にどう活用できるか検討する必要がある。

引用文献

- 1) 赤澤正人, 子どもの死の概念について, 臨床死生学年報, 2001, 6, P. 130-P. 137
- 2) 坂元章, テレビゲームは暴力性を高めるか, 児童心理, 1999, 52 (2), P105-112.
- 3) 青少年問題協議報告, 書東京都立教育研究所, 1998, 11, P13-20
- 4) 子どもの死生観の発達に関する研究, 三重看護学誌, 2014, 16, 1, p1-8
- 5) デーケン A, 死への準備教育の意義-生涯教育として捉える-, メディカルフレンド社, p162
- 6) グロルマン, E. A, 死ぬってどういうこと?子どもに「死」を語る時, 春秋社, 1992, 110, p71
- 7) 西村昇三, 小児と死の世界, メディカルフレンド社, 1986, p73
- 8) 宮本裕子, 死への準備教育の場とその在り方, メディカルフレンド社, 1986, p64
- 9) 稲村博, 死への準備教育の場とその在り方, メディカルフレンド社, 1986, P83
- 10) 相良みはる, 子どもの死と死後の世界観, 日本看護科学学会誌, 24, p13
- 11) Benner P, The tradition and skill of interpretive phenomenology in studying health, illness, and caring practices ,Interpretive Phenomenology : Embodiment Caring and Ethics in Health and Illness,p 99-127
- 12) Holloway L, Wheeler S., 質的研究入門-研究方法から論文作成まで, 医学書院, 1996